

[国内に発生したプラムポックスウイルスの効果的な撲滅と再侵入阻止技術の開発 (実用技術開発事業)]

ウメ輪紋ウイルス (PPV) 発生圃場におけるアブラムシ類の寄生状況と薬剤の防除効果

加藤綾奈・星 秀男・小野 剛・小谷野伸二・野地喜徳*
(生産環境科・*農振事)

【要 約】ウメ樹上において、幹母の孵化は2月下旬から始まり、4～6月にはウメコブおよびムギワラギクオマルアブラムシ、また、10月以降には複数種の顕著な寄生が確認される。春季の薬剤防除で、フロニカミド顆粒水溶剤に効果が認められない場合がある。

【目 的】

ウメに寄生するアブラムシ類の効果的な薬剤防除および防除体系構築の知見を集積するために、ウメ園における本虫の発生生態と効果的な薬剤防除時期を明らかにする。

【方 法】

1月12日～11月29日に、青梅市内のウメ輪紋ウイルス (PPV) 発生4圃場 (青梅市A～D) と、未発生の農総研青梅内の計5ヵ所のウメ圃場で、週1回、各圃場内の任意の20枝におけるアブラムシ類の寄生枝率および個体数、種類を調査した。また、生産者から聞き取った薬剤散布状況 (表1) とアブラムシ類の発生動向から薬剤の防除効果を検証した。

【成果の概要】

1. 寄生枝率および個体数と種類：幹母の孵化は、青梅市Bにおいて2月22日に初確認された。他の4圃場でも、散発的ながら4月中旬までは幹母の孵化および寄生が継続したが、幹母からの産仔は、青梅市BおよびC以外には認められなかった。春季は、ウメコブが青梅市Bを除く4圃場で4月中旬～5月中旬まで (寄生枝率は最高5～30%、個体数は同5～187頭)、その後、5月上旬～6月上旬までムギワラギクオマルが青梅市B～D内で局所的に確認された (同4～30%、18～592頭)。7月～9月は、いずれの圃場においても、寄生が認められなかった。秋季は、青梅市Cで10月25日に寄生が初確認されて以降、有翅虫の飛来および産卵雌の産仔が継続し、11月29日には寄生枝率34%、個体数は44頭に達した (図1、青梅市A、B、Dは伐採のため11月初旬で調査終了)。
2. 薬剤の防除効果：春季防除において、青梅市Bでは、ジノテフラン剤散布後約14日間は寄生が認められず、青梅市Cでも同剤散布後に寄生頭数、寄生枝率とも低下していることから、本剤の防除効果は高いと判断された。一方、青梅市Bにおける5月19日のフロニカミド剤散布では、散布前後で寄生枝率15%前後と変化がなく、個体数は247頭から592頭へと増加した。また、青梅市DのMEP剤散布 (5月上旬および中旬) も同様の傾向であり、これら2薬剤は、防除効果が認められない場合があった (図1)。
3. まとめ：青梅市のウメでは2月下旬から幹母の孵化が始まり、4～6月にはウメコブおよびムギワラギクオマルの2種が、時期をずらして発生することが明らかとなった。10月以降にも、昨年同様本虫の寄生が確認されたが、夏季の発生は年次により異なった。春季のネオニコチノイド系剤散布は、効果が高いことが再確認されたが、ムギワラギクオマルが優占した時期のフロニカミド剤散布は効果が認められなかった。今後、周年を通じた防除体系を構築する上で、発生種と薬剤の効果を検証する必要がある。

表1 各圃場におけるアブラムシ類防除薬剤の散布履歴

場所	番号	散布日	薬剤名(商品名)
青梅市A	①	4月 14～16日	アセタミプリド(モスピラン)水和剤
	②	5月 19～21日	フロニカミド(ウララDF)水和剤
	③	6月1～4日	ジノテフラン(スタークル)顆粒水和剤
青梅市B,C	①	4月 24日	ジノテフラン(スタークル)顆粒水和剤
	②	5月 19日	フロニカミド(ウララDF)水和剤
	③	6月 7日	フロニカミド(ウララDF)水和剤
青梅市D	①	4月中旬	マラソン(マラソン)乳剤
	②	5月上旬	MEP(スミチオン)乳剤
	③	5月中旬	MEP(スミチオン)乳剤
	④	6月上旬	MEP(スミチオン)乳剤

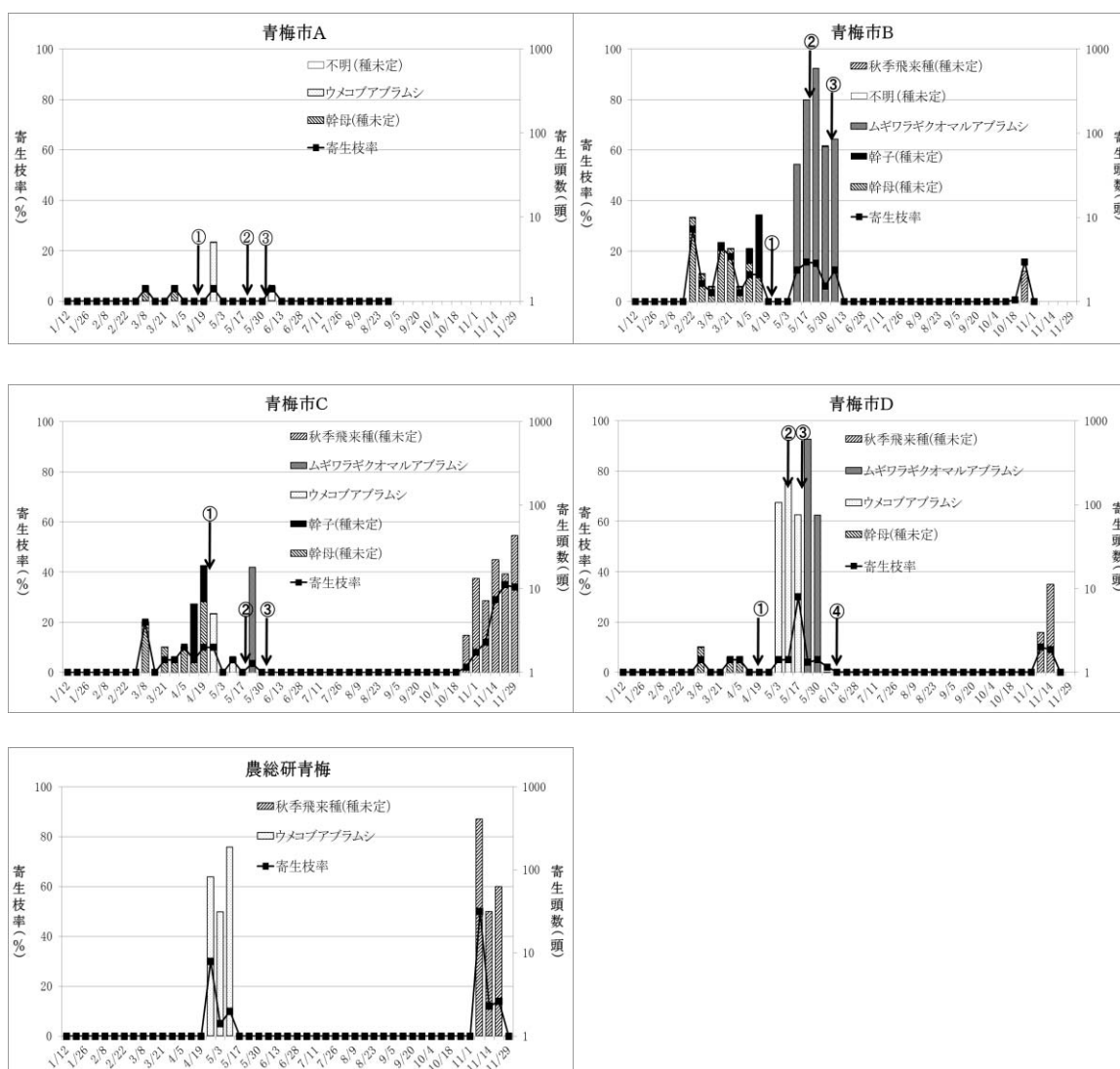


図1 ウメ樹上におけるアブラムシ類の寄生枝率と個体数の推移
(縦棒の個体数は対数表記 (N+1)。図中番号は表1の薬剤番号に対応)